東かつら

八

1 5
1386
9

門イ5
號1386
卷9

昭和十九年
三月二日故
小田切直
長男友太
郎氏寄贈

おかりま八の巻

萩の下葉八

人さこそ萩の下葉もかりまちて巻八きこし秋の
山ざとは たゞ独寝のうるいふしをうとしぬ〳〵おもし
きゆゑ〳〵ふるあぢしるまゝふるとしもいとゞとよみもするしきこえて
やうゝむすぼゝやあゝ君をうれさまくふわゝ思ふふ人乃ゑ
ふゝんふゝいゝでうゝんきこえんゝやうゝむさうゝどかし
おあうふ古ゝはるぼのゝこうゝはるゝ
須のゝふもうゝゝよゝまづのゝきるゝぼふもがゝるおはうふゝいみゝへゝざ
まゝみやゝぼゝるゝゝはゝのゝるゝまゝふゝゝびゝえゝ〳〵ゝ〳〵ゝ俗のゝなゝゑゝさ

かしこくある者は。立まじりてハ。かたりてもことはしくおぼえて。
あらたむるかしこいづこにもやうくにゆかれるものうせゆくハ。
いとくちをしきわざなし。葬礼(ハフリワザ)婚礼(トツギワザ)など。おもに田舎(井ナカ)にハ。ゆかしく
おもしろきことおほかりしをさへかく流るゝかなしひの事をあはれにおもふ
のやうに海づらに山ざとに至るまで。行わるゝかく記しぬ。すべてつたへ
て。物かたりもありしおもむきをしるしをかぬもなきにしもあらざり。葬祭(ハフリマツリ)などにものあるらぬ後ノ
世の物しれる人の考へ定めらるゝハ。其くにゝかゝるたぐひのたよりならのこと。
多く俗じらで悔さりしかゞはうらさしかし

よつぎ　先行ありて

よつぎハ。嫁ノ字をよむなり。こゝに女(ヲムナ)は男に行ふ方にのみつたへ

など。さるにあらねバ。鎮火祭ノ祝詞に。神(カム)伊佐奈伎(イザナギ)伊佐奈(イザナ)
美乃(ミノ)命(ミコト)。妹妹(イモセ)二柱(フタバシラ)。嫁継(トツギ)給氐(タマヒテ)云 ことあれど。しかるに男女行ふ
ことなれバいづ方よりもいふことし。古今著聞集に。天暦ノ帝景さい
ふ者ありけるに。條(クスリ)に度(ワタナベ)色ありて。番(ツガフ)が妹なりしをつぎふたりとて男
の方にもいづれそのころまで。けさいはれしへの言にならし物をさりし
なりき。又先あるさまをいふなる。女子を男に。おやの行なるかたふのこと
はるかなるを嫁なれバ。古事記に目合(メアハ)せと出流言あれ。ことも出
男女行ふことを云し。何方(イツカタ)よりもいふこと也。すべて漢字を訓むには。
ゆきとがしるくことなれまゝくハ合(アハ)ざることまぎる。後世には。訓ことなる
を字なることのこまかにて。言をことにうつりて。世数にて多きと。

すまひのほて　又たふさき

相撲(スマヒ)の最手(ホテ)といふもの、三代実録卅九の巻にみえたり、こは相撲すぐれたるにて、すまひのほてとは、今の世にいはゆる関取也、西宮記の相撲ノ條に、最手(ホテ)額田ノ成連、與(ト)二腋(ワキ)宇治部ノ利里一、決二勝(ス)負(ヲ)一とある、腋(ワキ)を今いふ関脇にて、小右記にも、常時ハ腋也とあり、又西宮抄にも、助手とあるも、腋のことなるべし、さて江家次第に、すまひのたちいづる所に、特鼻褌ノ上ニ著(テ)二狩衣一差(ス)レ紐(ヲ)とみえ、古今著聞集にも、烏帽子袴などを着ながら、すまひしよし見えて、かゝうはしやうもみえしを、強ふ常世相撲根合ノ抄にハちぎりなるをかぎりとなす、はみしえするぞ、うるはしかはりけること

なれば、むかしよりか、裸(ハダカ)にてもすることなりけむ、

○婦人の物まうでを、いつもかはる
ちかきころは、いにしへをもしのぶるがゆゑに、よのおもしろしとて、何物にもまれ、ことくいの物をもいへども、めでたきやうにしつくるがゆゑに、よろしくおほくみえず、おきなのしつ、婦人をもちふる物にかへて、あきつくる物、あるは玄乃中なるかけらなどもなれど、はる年(ヤホトセ)になりなむとすらむに、へしくうつりとゆかしき物もちて、つぎつぎにいつくしくなりにける物と、おもほしきて、さらぬものもえつらしきもの、世の中にはあれど、その物をさがしもとめて、國(クニ)をさまにうつしてはなぎくとおもきさまにでも、写しつたへてたりてあらずとも、又学ぶに、いやしくも偽(リ)ある、まことのものにまさりて、いとよき

のまちなるその社にし、いとめづらしき物ぞ。その町なるなにがしが山よりほ
り出たる。なにのうつはなれど、古き物なる圖(カタ)をも、はなはだしく
おのづから造りいでて人をまどはせるなど、文字さへいとくはしくわぢ
きなく、ふるきさまなれば、ふたつなきものにて、かの國の酒折(サカヲリノミヤ)に
ありし、倭建命の御事は、ひつぎの御子、火ともしの翁のかたち、
火揚命像とありしなる、かの酒折社の屋根の板のあるに
より近き年出たるにとて、うつしもちたる人のえたるは、ふるきに上つ
代の人のあるべきをもて、まことにいみじくめでたきものにれ
ど、めづらかにおぼえて、おのれもうつしおきたる。なほいと
めづらし、さるはかくしもあるべきかなしげなり。その社ち

かれ里に、某(シレヘコ)なるが許へ、ありしは、そのえうるは、いかなるにかの
くだりにや、それをしも、ありくいつはりをもて、こなたかな
のやしろの神主飯田氏になむとひしに、さるふかきよしもなきなるべし
といひおこせし、わき文同じつる桧垣嫗(ヒカキノオウナ)が、みづからきざみてる
ちひさき木の像(カタ)の、肥後ノ国の、ふるき寺にありといふそれより、
ちかく掘出たるうつしとて、ある人の写しつるをもてきたるを見
えたる。これもちかき世に、ある人のつくれるやうにはきこえ
ます。それものなれど、うたがはしく、なほいかがあるべし、
のみにて、今はゆくへもしらずなりてつたへざりし、なほべし。
言のはいふ本なるをも、ありつしくもあるを

ぬ中なりびきるそとがく。古言はに。きりはりめきるに。きく海
わ〜〜きる〜。人ふるまべ。そふて。考し。ぬいふ本のそろ〜い。
るるへむ天（アメ）といふそ。いろはるこそ。地（ツチ）といふそいろはるこそ。といい
ぬしるべひし。こもも学び乃一ツて。きとけるべきこふそあを
ごと。さ〜けるわて。もひときべきこそごあはわ〜び。太うといふ人
の言ハ。ぬつふ本ちこふそきるもちりハ。古人の男ひしるこふそよくは
ら先きるべきし。男ひるこそとぶふよく。わきこめ形ハ。ぬいふ本
のこハきるでもけるべきし。そもく。茅（ちく）ちゃ。そのおをよ
く時るめて。ふをハ侍ふきべきハ。海ゐ多もど。ぬのこふもけるぬ
るどこて。ふ時きるふらわてハ。ふをりりゃづ和〜て。後ろ本

へるけるのるべきもけるぞかし。大うと言はおのこハきりるれ
るどふて。ふもと考へえ〜ふもく。ふふもけるりやわ〜びや。きど
先がく〜。多くハけるりどるきるどし。きもバるはたのがくりし
ふ。そのおはこきるこそバ。のどをおきて。ふへたくも。いふ〜人
のけるひるこふそ。人をつきて。ふ〜時〜むべきるどし。ふそひち
りふはきこハふ〜時〜むこそも。いはるこそ侍ふたひるわ
ふいふこふそきるでハ。行のうひもはく。おのゞ前文ふ用ゐるも。
むゞこはきるし。今の学古学をきるふとがるはどはふ。ふこと
ほき言ふいへば。まゞ紙いふ本はきをきるむふのこして。用
ひるこふそ。考へ学こるもせどる侍ふ。おのゞけるふ。いみしきむ

がちなることおほきぞかし。さるを言ハ、ちかくいふ本のまゝに、用ひらるゝこと
とハ、多くハ、いらしかるねりの心しるも見えぬなめく、歌にいふ言ハりと。
これなるへりなるへりなゝ、語の中間（ナカラ）なることの言なれども、用ひらるゝこと
なるを、なまさひあくいふこと、文にかきてハ、さてもいふことかも用
ゐるなり。然るを言の本によりて、うちまかせて、中間（ナカラ）なることに用ひ
てそ、なかやし。又ろう後ぞかしといふ言ハ、今の俗言（ヨノコト）に、気毒（キノドク）なることい
ふことに用ひらるゝ、言のやうに、心の苦（ニガ）きことに用ひてハ、なるがあり。
さきばかりなくて、万の言をも、なぞらへんに、まだいまし
に用ひらるゝやうを、さきとして、ゆくへとるべし。その本のことよりて
ては、中々にいまはしくへにるかなしとおぼゆるべしかし。

長歌の句のつゞき五七なると七五なるとのこと

今の人の長歌よみあぐるをきくに、おほく七五七五とよ
みながくぞ聞ゆれど、万葉の長歌の句のさまを見るに、ちかく句みな
五七五七とつゞきて、七五とつゞきたるは、いとまれにて、されば
今もさやうに誦（ヨ）む時も、句のきれめにて、五七〳〵とこそよむべきなれ。
然るに古今集よりこなたの長歌ハ、まづ先の句ハ、五七なれども、
つぎ〳〵ハ、おほく七五〳〵とつゞきたるも、今のよみ様にかなへるを
ならし。なべて七五〳〵とよむことも、もとよりよくて、さもあるべくもよけれ
しかるを、ふるき歌に、ながめて思ふに、古今集のころよりしても、
またくさなるをむかしのさまに、そのよみつゞけてよみ出る歌も、おのづ

かゝる句ばかりなるべし。さて中ごろの今やうといふ句、そのち
のゝのちの句は、俗（サトビ）なるうゑにもあづひたるべく、後の句を皆、さて
句は句ゝゝ七五にしてとゝ万葉にて終りまでは、五七ゝにたゞくゝ
ちゝべよろしかりけるものを、古今集のころよりして、七五ゝなりて、
今もそれよりあしくあゞめるはいまゝへと後の世にこの花のづゝ
のちゝべのゝうたとなるべし。今云ふ万葉風をよむ人おかくても、行すも
後の世をばうるしゝといふものゝ、そのよみある歌をとんとばそのゝこゝぞ。
おかくは七五くゝとたゞきるは、式部ぢなをえちゝぜしてなを後
の世はおのづゝゝはちゝべをえまぬゝもざるし。古今集はあゞ歌
ちゞめなる二句は、七五ゝとまゞりてつゞきるを、後の三句は、

おかゝゝ七五ゝにたゞとなり。

○今は人の句文をゞてしおもきゝ

ちかきよの人のゝ、うゝも文を、大ゝへよりしゝ又雪にも花
かゝゞ花にはあるきゞうし。ちゝでこのしゞゞる物し。況んとも
歌人ゝゝよふなりゝ。ばしゝゞかいるゞふゝかしゝえんゝゝこと
ゞをたゞひゝ。さきゝて。よみすゝかきちしゝゝをばまゝふ
ゝゝえて。人のゝてもやし。ほゝしゝゝをばゝをやゝてゝゝ
ゞゞかゝをゝふゝかゝゝゝゝゝゝがゝしくゝえゞおりゝゝ。
ゝふゝゝゝかゝゝゝあのゞ物ゝることゝ。おかいふゝゞをたゝ
むゝ。物ゝゝえゝゝゝゝ人のゝゝゝゞゝづゝかゝゝる。人

のむかしのらしく見えてまかりにつけては、物をよく見わきまへぬれば、
ひがごとハおぼえて思ひかへすことども学ぶ人のこころをさとらかし
あるものハ、うたがはしきことぐさにもわたれば、此の人ばかりにぞはね
んきざみがひきいとざはりきえぬ。

○から國とよくその文かゝる
ちかき世の人の文などをも見たつむるに、一ツしおりし
見ゆることはほどくにわたると何見えどもさとらくいふなぞやお
ぼゆるそを後のまじりて、大かたきまぞなくそのひとるはなさく
見しぞ、此書もは思へど、後の世にしていまをしへをまなぶてはいとく
くれらずにはあるもしるすにしへ乃かしこき人をしのぶことぞ

しも、家のきまでなしとおもひゆるは、多かる中にもことにあくかん
わざば、ましく今の人のさかしらあるきまでをとり、かひろき
むきに、なかごろなるにや、あるむきとも、同じくは、人のいさめをも
あんぞてべきふしまぜなさ毎にてそは何かと満ちしりよきふごと
ありし、心をやわきをだし、ひたすらしたいかしつの人もよからぬことに
とひあまりなるそや

○こうさく　といふ事

いづれのまなびにも、講釈とて、古き書のこころをときき
きかするをきくこともし、中昔にはそれを談義となんい
ひろき、今はだんぎとは法師のおろかなるものゝをしへて、佛の

そをいひきかするをのみいそしくこころざしてなり。
さて此ふみかくといふゆゑは。師のいふことをのみまもりて。こ
がむあて考ふることなかりせば。猶まなびのしるしはやくなしとて。
今やうの儒者などは。よく深しかしこきさしもして。会読といふこと
をおこなひてなる。そはこころざしふかきはやうかうにて。おのくいつどひかむ
かへし。おもひえたるさまをも。いひかはして。たがひにたゞしあへるを。
きゝかへさひもして。かたみにわきまへあらそひ。さだむるさまなればぞ
学問のうへによろしきわざとはいふなれ。さるをしも
えらびてよの中にはそこなふものゝ多くありて。そのかどこ
そ。かゝる人へまとひ。おほけつひはすまふるべきさまにのみなりなむ。また

かさねまどは。おのづからおこたりて。一かたならぬも。多くよみわたり
ゆかしきこともこころよはどに。いふぞや。おほかるやしげく。それもおほく
たづねかうかへるをとならひりて。おほくしるつゐてよむにも。
かゝるこゝろなれば。おのづから集ひよるかひもなき中に。うひまなびのと
もがらなどは。いさゝかなるみだりがはしき考へも。深くちかうるはなきそこ
はさるもかたじけなく。かたちなる故に。さとしふとひいでむとても
まじくて。ゆゑなきふることぞしや。家のなれば。さるをとがむ
なども此しるゆゑなり。然るに猿楽ぞまもりてはなにもかも
も。ただ師のいふことをのみ称えて。こちらにいまさらむとも思はでいふ
むかしとのきしむきにいふひとしく。ちくしきるさまし。また

下心といふことハよくきゝて、ちじめんなるか、ゆうぎわハ、みづからの名
く思ひたまへるにや、きこえがたき所くハ、ふんをいとして
くへもひよみおけば、きく時ふんの前ある所にさとらるゝも、こよ
なくしそ。よきれなりのし、よき方てかへりかつかしくおもひしも、
やがてかなはんといふことばしも、きく、かはしおのむきを思ひ
書し、味ふべし。文字書といひて、きくしその類をうきあはれ
なるを、さてハ中にふるきれいを達べきぬしなどと、きこゆ。いこそ
うづくましかなもふさともみべきござあるを、はじめより師のい
ふまゝ、中一つをりもさずしと、学ちからさてさてくふかきつゞく
後しきもしこゝろさくハよく人を考へて、このこゝろをとゞま

やうにきこゆべきことがらなるに、さきだちてそれハきゝてかくよわもお
まづじとかく方に、人をいそがせて、おとして書きふ、此ふよくきく
べきふしをかつすれども、しきてめし行るハ、わらぬをちふきて心
がみもちあそびし、ふこと、御しも、いみしきうぶふ思ひて、いそじ
ら残る高ふさんしきむしとぞ、こよふの心をいとぞむる
れぞふりけるゝのこゝろてふ物語しぞひもあぐうるハ、
といそ行ちきれさあらひふさん事なる。

かむかへといふ詞

かむかへといふ言を、かんがへとも、かうがへともいふを、後の書どもに
て、かりでもハむを牟とかけり、下ぬかなる、…て…いし

何ゝらべし。こゝに世言ゆゝしきことかきいゝ所〳〵もいとゞ見ひえざ
まぐれむとへさかしてくらべ比校へて見ひえぐ〳〵にこと所
べき所、古役ゝ人をんゝ見ひもいひまかゝその古役ふ
所ゝ例ゝてかをも得るし。物をちきゝ所、古書ゆゝ
かゝ行文ゝ。こゝ所かゞ物へゝといふゝ人ゝ倒もよ
しゝ所きみゞゝでゝし。こゝゝ見ひゞかゞゝのゝし行文ふ。
ひきゝゝゝまゝゝこと出ゝこゝ所ゝ倭建命行伝
ふかゞ物べゝ。ふゝこゝのようゝゝ行をふ物伝ゝ見ひしゝる
ものし。此所ゆゝゞ物べゝハ考へてゝいふゝ所ゝ物所
を後の学者、そのゝ所ゝをも。よゝもしふゞひゝ。ゝゞ

かの大人乃書物をゆゝゝ物へゝゝゝゝ所ゝゝゝゝ
いふゝふゞや。ゝゞて近きゝゞゝ古書ゆゝゝ物をゝ
ゝゝ。ゝゝひゝ文を物ゝゝゝ所ゝゝゝ。ゝ所ゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ物へゝゝ所ゝゝゝゝ。

いとんやゝいふ何

況ゝいとんやハいふゝ多ゞゞゝふゝ行言ゝ平康物入ゝゞ
宝物集に。やゝんや十六丈をや。いゝんや金銅をやゝゝ大仏の
ゝゞゝゝゝゝ所いゝゝ。此十ゝゝやゝゝいふ所てゝんゝ所ゞし。

用捨

ゆゝゝゝゝ所。俗ゝゝふ。用捨ゝゝゝいふゝ。白氏文集の中の文ふ。

若違命執迷則罔有容捨といへるごとく全く依りしいふ
ことばなし。此字然るべし。用ノ字、容かくハ用ゆると捨るとをいふ
用捨と紛ひつるなり

流行

栄花物語若枝巻にも久しく屏風凡帳ばかりを、ひきつゞけ
給へ、おりもしらへてゐりとあり。局をいふなり。つゞけやうに流行も
ゐるなどいふ語のよしなり。

掛詞

天文月日などいふをもそへすれば、あさくてさとしひきをいふも
そし。まづあしひきの、といふやうなる類ひ乃詞を、よみ掛詞といふ。

此名昔からハ古も及ばれど、中昔此あたりいひそめし頃にや、言を
掛としといふをかしらにおく歌とゝなふとも思ふ名まで、さりゐ
あらば掛をかしらにおく物ゆゑハかくいへば、歌のさしゆゑなの
ふくそへ行きさるハかしらのをはもわかるべき物のうれて間
の行きくる所をさしゆる趣を、行歌もまるつるとハいへど、名所を云
掛といふも一句ミ葉のとりで。解する言ばなかく、よしの山く
此中よしハ掛詞といふも、そのでう出でにしひそくきんり梅
の記をゑしてもみてぞあさかのうしがいひこくきしき時とあ
しひきべくあらしのごとし。それから其ハ一つのさ由にいそいふ
と於べし。掛る言かけずる也。後の世人のゝとそさる一つなり

ばきてぞ名づけしなり。なのべてハかしこんかあく。汨羅ハ吾
師の冠詞（ムスビノコトバ）といふれしるぞ。古とうのかうひて、有りる系とハあと
ぞと。今ハ行ゆく。拾遺といひてこんひとバ古とうハいふ
まなぶまでもなりなべてて。

筑前國續風土記

筑前國續風土記といふ物あり。貝原篤信がつくりなせる物こそ
て。かの西国乃ものどもをこそ。ものしるしてこそ。おのもとのうち
とづるふ。六七八十五十云て。五巻をえしわ。手紙（ホカ）をいはざえんぶ。
十あ十云の二十きハ。宗像郡のこと也。十五の巻ハ。宗像郡
ものしるしてこそ。宗像（ミムナカタ）三神の御社のこと也。せ一ききハ。

写しおきしより。六七八の三巻ハ。御笠郡也。そもそもこの貝系乃
翁ハ。名しるし。偽ものて。ものしらぬ書ものを。ものしりて。皆よ
ふ。ものまねぶ。日本紀ハ。中ふ大きなる。ものを。ものしるふ。ものぶ
ものしる。人まねふして。おのもとものちぐ。ものて。ものしる。
いふもものづくふおぐして。ものき出ること。

玄蘇といひしほうし

豊臣太閤の朝鮮伐（ヲツ）の時ふ。その命（ミコト）をうけ給りて。明（ミン）の国
まかり渡りて。その国王ものあひ。ものしる。ものの。ものの。ものの。ものの書
ものしる。玄蘇といひし禅僧。ものし。ハ。筑前ものの宗像郡西々と
いふ所の人。伊豆ものの伊東祐信ものもとものあり。ものし者。筑前ものふ

書に住名をもしるす孫ふ河津新四郎隆業といひし人乃
るし天文六年ふ此西行ものもと後ふハ対馬ふかをゝるも此伝の
詩文の集成仙巣稿といふ巻長十六丈十二月廿二日ふ七十五
ふしてはしるもてみまかりるとしかの孫ふ続風土記ふ記ものと

かんるまんるゝんぐーみんるゝ

俤(カナ)をわんるとハいるべし字(ナ)ハまんるゝいるハゝんぐーるゝ
かるハりまかりるゝ孫ゝ其のもを書伝りんといひしかん
るとハいふるゝ(ナ)ハまんるハまんるゝいるべきもとるわるゝそゝかる
んるふるゝひるゝゆるわるゝほどるゝふんをゝへるりるゝ
又南(ミナミ)をみんるゝをいふるゝんぐーにるゝ

ゝるゝ。みぐりふんをゝへるゝんぐーハりるゝゝるゝ。ゝんむ
るるハゝるのむを伝の書伝りんといひんふるゝゝるのゝ
かを留るゝ伝し孫ふみるゝハみんるゝゝいるべきゝるゝ。
ゝゝ書伝ゝゝんを保ていふゝゝるゝ多くるゝど此まんるみ
んるゝゝハゝゝ例ゝハわゝゝで。かんるゝんぐーにるゝひゝゝみぐ
るゝゝるゝかゝ。

男ふ名ふも菜(ナニコ)ふゝいるゝ

中書ゝりるゝゝ女名ゝ菜(ナニコ)ふゝいるゝゝなべくゝの伝しいふ
へふもをりゝるゝゝるゝゝはゝているゝへゝ男ふ名ふも子ゝいへ
ふゝゝまべ神武天皇ふ伊号ふ石押分之子(イハオシワクノコ)・稚倭根子(ワカヤネコ)・賛持之子(ニヘモツノコ)を

いつあるを。たゝる紀仁德天皇に仕ふ口子。書紀應神
御巻ふ壹岐直真根子。仁德巻ふ茨田連衫子。又佐伯直
阿俄能胡。履中巻ふ阿曇連濱子。雄略巻ふ佐伯
部仲子。又雄波吉士赤目子。又倭子連。又水江浦嶋子。継躬
に考ふ。筑紫君葛子。又目頰子。安閑御巻ふ。稚子直。欽明に
巻ふ。中臣連鎌子。又葛城山田直瑞子。敏達に考ふ。吉士金子。
又大伴糠手子連。又物部贄子連。推古巻ふ。小野臣妹子
なゝ。又たゝ。右の名ゝ。中ふ石押分子。贄持子。
古事記書紀ともふ之字。仁德巻の衫子の訓注ふ。宮
呂毋能古。また阿俄能胡。又浦嶋子。又中臣系図ふ。

鎌足公の祖父の名。方子。加多能子。も出ふ。ふ拾ふ
ふ。ふ。皆葉子。之を。てふ。べきふ。
ど。又継躬巻ふ目頰子。ふ梅豆羅古。ふ。バ。て
之。ふ。も。ふ。又推古巻ふ。阿倍臣鳥。ふ人
を。鳥子。ふ。又敏達に考ふ。蘇手子。連を。崇峻に巻ふ。
蘇手連。ふ。舒明に巻に。中臣連弥氣。ふ人を。家系図
ふ。御食子。大連公。ふ。又皇極巻ふ。巨勢臣德太。
ふ人を。孝德巻ふ。德陀古。ふ。ふ。
ば。子。ふ。ふ。

出定後語。ふ。

ちうれよ大坂より。冨永仲基といひし人創延享はじめ。
出定後語といひ。やみをつらぬきて。佛のまこと絶倫の
絶倫なるいふ書ども。をびただしく引出し。そしり。
侮ふめるもいとちなるうたがはしく。此人儒のまなび
をもとゝしひろくよみて。その漢文も。ときたかく
ぞ。佛学をこの所へ。えしらぬほどハしと。諸宗の和しりとゝ
ゝ。ほしいまゝにかぞへわゝぬぞかの考証学しるし
つゝでいくいみしきさまなる。そのち無相をいひ
ほしいまゝ。非出定といふ書。此出定をやぶりて
まどそへくるおのづからいつるとふらして。そゝぐ

小大乗を出して。のゝしるとゝのゝ。一ぐわつぶよりゝ破てえ
ゝゝハ。ゝゝ。むぎまいつゝひろきあしゝハ音韻のまゝびあ
ゝるき侮ゝ。ゝ。ゝゝ。ゝゝハ。ゝかわしゝゝ。ゝ。
ゝゝでかのゝと乃ゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ。出定
をぞ。ゝゝゝやぶゝゝとゝゝゝゝ。

芙蓉集ふ平知ゝいふ言郭ふゝゝかゝりゝゝ。
乃蓉集ふの。ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝ遠知ゝゝ。ゝ。ゝゝゝゝゝゝ。
身ゝゝ越知ぬべゝ。此二つの遠知ゝいふ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。ゝ。

考へ合せるに、まづ此二つくハえ、しく紙業ふ生て、京洛をしく出
ゐくと考るふて、さてめけ方ハ、ゑがよりひさかりるて、いくくか
ゐるへくゐ、今ハうけ方ハ、ゐ淮南王の仙素を服(ふく)ゐと、又
ゐ生き言ふゐるゐ、ハえわしじとし、次ゐるハ、淮南王ゐ業洛をまん
ゐるハ、永ゐ京をえくゐバ、又茅ふゐて、ゐかくゐるべくとし、遠知(ヲチ)
ゐ行ゐ、ゐくゐ、又ゐかくゐることゐて、世ゐどもゐるハ、身の又ゐゐ
かりしむうしゐゐをゐるし、ナセ方ゐ、家方ゐ方ゐ方ゐ、
ゐバゐゐ手知(ヲチ)ゐかや、ゐ紀ゐ、ゐゐ鷹をほゐゐて、ゐ乃
手知(ヲチ)ゐ、ゐ方ゐ手へゐりゐるゐをいゐし、ゐ方ゐ巻ゐ、ゐゐ家ゐ
ゐるなゐてゐちひハをゐゆゐ、ゐゐるゐいや手知(ヲチ)ふさけ、ゐも

又ちゐ、ゐへかゐりくくしゐゐ、ゐくくゐ、ゐをくいゐし、みゐる
ふ、ゐ方ゐふ、ゐちかゐりゐ、ゐくくゐ、ゐ方ゐ、ゐへゐりゐて
なくをいゐし、此ゐのゐ、ゐ方ゐ方ゐ川ゐ会ゐて、ゐゐひゐりゐひ
てしてゐるべし。

万葉集ふ多太加(メバカ)といふゐ、麻佐加(サカ)といふゐ

万葉集ふ、ゐ太かといふゐ、麻佐加といふゐ、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ
しきがめし、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ、
いくよくゐ、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ、
ゐふゐ、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ、ゐ方ゐ、
ゐ。君(キミ)ゐ直香(メバカ)、公(キミ)ゐ正香(メバカ)、吉美(キミ)ゐ多太可(メバカ)、妹(イモ)ゐ直香(メバカ)、妹(イモ)ゐ正香(メバカ)

あぐみて、此かのいひざゐハなり。麻佐加の方ハ、真坂者君尓
縁西物乎、まゝ何時之真坂毛常不所忘、まゝ麻左香毛可
奈思、まゝ麻左可思余加婆、まゝ伊未能麻左可毋ぐみて、
多太加とハいひざゐなり、まゝ異し、物をうち正香とも係を偽つと
て麻佐加と例るかゝ、まぎゝうきし、正香ハ麻佐加うつゝび、
多太加ゐるゝ、いひざゐの係をりてうたへべし、まて多太加と
も、君まゝ妹を直ふさ、いつゝゐるゝて、君妹とのゝいつゝ同じ
こゝふ物ゆゝし、麻佐加とハ、物ゝ者に対へて、今まゝ、うつゝ物をい
ゐゐと、集中ふゝゐる字ゐと、考へるゝて知べし、まゝ中ゐ由理といふ
ぬゝ対へゝいつゐゐり、中理り、後ゝいつゐとゐて、今ふ対ひるゐゐし、

まて、今ゝ係ふ、まゝゐの物ゝいつゐゐるゐ、ゐゝまゝゐ、まゝ乃
物ゝ加ゐゐるゐ物と、

菜屋といふ者の号ゝ

近き号商人の者ゝ号ゝ、おゝ物ゝ、菜屋といふ、ゐゐゐ、ゐゝ乃
ゐゐ、まゝ酒屋茶屋ゐゐ、ゐゝ物をうゐ係ゐふ
て、こハ物ゝをゝ、ひゝ、ゐゝにゐ者等、又大和屋河内屋堺屋大津
屋ゐゐ、ゝゝ、ひハ、先祖の出ゝゐ屋ゝ名し、又えびを屋大黒屋
物ゝハ、後称ゝいつゐとゐて、いゐひゐゐし、又松屋藤屋桔梗屋菊
屋、鍵屋玉屋、海老屋亀屋物ゝいつゐ、ひ、本者ゝ名、うつゝ物乃名、
いつゐハ、魚ゐの名なゝ、りて、佐ゐまゐハ、風儀ゝ、ゝ、この名ゐ、て、こゝ

も中原ノ康富ノ記ス。應永廿七年十一月七日壬申。春
日祭也。予依テ為ニ分配ニ。早朝南都ニ下向ス。天盖大路ノ亀屋ニ
着ク之。史貞職行秀等同宿也。とあるをみれバ。そのむかしも
やどりとせし。この亀屋ハ。旅人やどせる家なりや有けむ。さて
このやどりの号ナハ。なほこし時まで。某堂某亭某軒某齋などゝ
いふとほどころぞへなりける事ふむかしハ。商人アキビトのうちよりも純
なるべき者も。好みて法ましかりとみえて。伊勢の御師といふもの
のなどにも。某屋ナニヤ太夫といふが多くあるにぞハ。かの風流ミヤビなると好
みし法名なる人の家にありしなるべく。某屋とハつくゆゑ
なし。今ハなべて早イヤシき号ナとなりて。先祖なる人傳へたるをもい
ならひて。屋ノ字ヲ。谷なとへなどしをゝみれば。さてかのむかしの時。某堂某
齋のやどりは。物しれる人風雅ミヤビト人などにも。商人にもあることおほくて。
同じさまにふるくなりたるを。諸国までもひろく。ふるく人多き。
それをバ。ゆかしき人の家は号ナになほぞしていふことなきハ。おほく見えぬる
にまぎるれど。なるべし。ちかきころ近きころ。古への事のみなびたるものがたりハ。そ
の某堂某齋のやどりをかくえきかふ。源さかりて。皇都ミヤコにて
なかにて法会をとなふるに。松屋菊屋などのやどりを。さくとがふさき
むくなるなふ。法くべき号ナなくて。号ひきふめたる。或ハ某ナニノ屋となのと
じを除て。かむとあれども。本意なけど。うちに。みやびたる名を殺
あはれく聞ぞ。ちくにもかしこにも。同じことのいでく。ゑかりぞとく

もろこしの名を、多く二字につゞめても、たゞちに、いかさまにも
心にまかせて、みだりにつくべきにあらず。皇国言ハ二つならでハ長く
なれて、よびぐるしき程ぞ、かならずはぶくべきもあり。
もろこしの漢の丙吉といひし人のこと
わらハべの蒙求といふふみをよむをきけバ、かの国の漢とい
ひし代に、丙吉といふ大臣有けり。春のころ、道へゆくをり、
牛の人におはれてあるが、舌を出していみじく苦しげにあへぐ
を見て、いまだ夏にもいたらざるに、此うしのいたく暑がれバこそかく喘
ぐならめ、時候のさだまらぬなり、かゝるハ天の下乃ことをあひ
あるべきことぞ。國の大臣ハ、かゝる陰陽をとゝのふることをむねと
すべきわざなるに、今かくなを、まがふべきことぞ、といひけり
とぞ。みな人ハ、げにとかしこまりて、よにいみしきことに思ひあへりけり。今
おもふにこそ、いとをこがましきことなれ。暑き寒きなりとて、それ
によりてハ、なべて皆それへにてもあるらん。又さばかり陰陽のと
とのひを、しりかきくらすむねハ、たゞふみびとのこゝろむなき
わざなるに、ゆくりなくそこひに、牛の喘を見て、ゆくりなくさ
ぞわたるハ、いふかひなし、げにいつくしのわざを見ずハ、さてもやむべ
きにや、さればこそ、まづふさはしくいつはりて、人もいろしき
ことに思はむとての、ことわりにて有けむ。げに、かゝるふ
んばかりハ、つひにうき事となりのむねを、よにいみしきてふ

きて つつしみまもるもいとをこがましかりし又ものとより陰陽をそなへのふるまひ
いふことなるべくもあらねどもさべき世中のすはからひは天地のあるじ
やうに行はるるみる神のはからひなるべしさ
らふ人のまるべきうるはしきをかくもてなしぎふいひるるとハ
さべくかの宝人乃わらひまそいとくしくうるはれるぐしらし
周公旦ゲンひとる飯を吐出して賢人をまつらいつる
又きけば周公旦といひける聖人のふるまいはまことに我一沐
三握髮一飯三吐哺起以待士猶恐失天下之賢人と
いつるりまことふかしくもりなもよの人のいうきこと
ふ思はもしくそのそかわるしいふ賢人を思へばそそ心ふへしふ

是飯を呑いつるまはまことやうやうもみべき出迎へむそはかどふ
てものをいつもむてはいとやをうべきをおそるふ吐出して人をん
せるハ行るまぞやさべくかのあらハかくるふ苦しくこまやかき
物るまひをしくるるみぐひ乃行るふ法をてもあきハみる名を
むさぐわしくるあるてちるゆいとうあさきあるひ
藤谷成章といひける人のよ
ちうきて後京の後谷まるに用つ成章をいふ人有るそをぶ法く
まるかぐるあるひあるひ六運国異ぶどいふふどをとて おく
ろうをぬそをとよりさるとうもいるる人をとハの学ふりるぐ
例の今やうはいまでは学しはうとあるしくみくをくざる

しかも此ゆゑどもをこそ、さまる人うたがるやうにしかば、けちうきわざ、みやこかりぬべく、ゆゑ、又おどろうもぬ、そと〳〵けごろろ、こゝろことゝどもハ、ちう〳〵人のまもまもわて、ものひ〳〵ふくゞるとふをしあるとハ、おのゝ、ものゝ世をえるかゝして、ゐやとしうぶ
ふ、をでよ、ふる、ものかきる文いる、ゐ、ものゝとまけど、ゑがてのこゝ、ゑく、みるいくまぐ〳〵に力のふて、こゝハとゐがゆるハいとう〳〵
まして、ぬ、ものゝハ、ふゑてたきよふ、この藤ゐゝ、ふるゝみぐひ
ふわゝぎ、又ゆるきさぐ、そうく、みぐりふゑきこのこゝいふ
とりがゝちこよふおわうるとゝ、ふるゝとゞひうしたうゝ、ひ、ものゝ
あるこゝちこハいうゞたうゝむ、ちゝゝ、ひ、ゝ運の辨ふいるおとむきを

ふるふ、古〻集よりこゝろざるゝ、ものやうに、よく〳〵えまるこ
とハ、大りこちうき、ふなゝぶ人あるじしそ、ゐがゆる北を集と
いひ〳〵、ものゝ、ゝ、ふよやうゝハ、ゝ〳〵とゝぐれ
ふうとハなるゝどいまゝよのゝようのやうゝ、ゑゞてハ、ゝ〳〵
ふゝぎなりんをゝる、ゝとうゝしき人のゝくもうせやゝよ、
そのゝゝゝ、ものゝ、ゝ、まゞ〳〵ゝをゝゞ、ゝとて、ゝゞ
と世ゝとものゝとゝ、ゝ〳〵ハ、ちゝゝ、ものゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
のゝ〳〵ゝゐがゝ、ゝ、ゝがゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

かゝ〳〵ぶを、蓋（ケダシ）といつる字ハおかゝ〳〵ぶをおゝ〳〵かりてさゞめく
ゑとゝ〳〵ゆおかるやうゑゆゑ、ゆ紫集より、此おゝばのをゝ
をゝとゝるを考ふるにバ、うゝぶゝ形ゝとハをもいひざまゝ、やゝう
をゝて、をゝ〳〵かくをゝあゝ〳〵をゝ、とゝつゝをゝてゝ、ふゝをゝうゝ、ゝゝ、二のをゝ
ふゝいゝゝ〳〵ふゝゝゝ〳〵むゝをゝハゝゝ〳〵ゝぎゝをゝ〳〵や、ゝゝ〳〵こゝがゝふ
ゑゝゝ〳〵、をゝゝ〳〵ゝゝ、ゝゝふゝきゝやゝう形ゝゝゝ〳〵ごゝをハ、郭ゝハゝいゝゝ〳〵をゝ
ゝるゝをゝとゝつゝふゝをゝとバ、今ゝゝゝつゝゝゝ、ゝゝ、ハゝをゝがゝゝ〳〵ゝふ、ゝをゝをゝひゝてゝをゝき
ゝをゝふゝやゝゝゝゝん、とゝつゝふゝをゝし、ゝゝゝをゝふ、ゝゝをゝハ、ゝゝゝ〳〵ゝをゝをゝも、ゝ
ゝをゝハ、ゝ〳〵ゝゝゝゝをゝふ、ゝゝゝ〳〵ゝゝをゝをゝゝゝゝゝゝハゝを
ゝ〳〵ゝふゝをゝとゝゝゝん、ゝゝし、ゝゝゝをゝふ、ゝゝゝ〳〵ゝゝをゝ、ゝゝゝゝハ、ゝ〳〵

をゝし、又ゝゝ〳〵ゝ多にゝゝをゝゝゝゝゝハ、ゝ〳〵ゝゝをゝゝゝゝふゝゝ
ゝゝゝゝゝゝし、又ゝゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝ

明月記ニ圍碁双六將騎等盤ヽ云ヽ將騎ハ將碁乃ヽ
ヽ云ヽ園大暦ニ大炊御門大納言入道同入来有ニ將碁
興ヽ云ヽ

ゝゝハやゝ沈おゝゝヽ又おゝゝび

同明月記ニ二位殿御發心地今日令發給ヽ云ヽ又
園大暦ニ春宮大夫瘧病未落居今日即發日也

續本

同記ニ寛喜二年三月七日兩株八重櫻一條殿花漸
開永日徒然令分栽菊苗草不憚土用ヽ云ヽ續本ヽ
ヽ云ヽ

為後日ヽ云ヽ三物ヽ云ヽ

今院文のゝゝニ為後日ヽ云ヽ家地賣買券ヽ仍為後日ヽ立新券ヽ仍為後
日ヽ相副本券等立新券如件ヽ云ヽ屋藏ヽ
のゝゝびを云ヽ物ヽ云ヽ永保三年ヽ券ニ立
物屋捌宇ヽ云ヽ

ゝやかび

元長ヽ記ニ大永五年二月二日云ヽ相國寺有早鐘未聞子
細無覚束ヽ云ヽ

貴下

今学ぶせうとゝ多の當名はうとてゝふ貴下とおしてわと
台記ゝ足下ゝどいつべきゝ多ふ貴下ゝかきゝるゝ
取ふゝしゝゝ

ゝゝゝゝ病

同記ふ日来患鼻垂疾俄身温まゝ依鼻垂不念珠但
今日無温氣也まゝ鼻垂後始念珠夜前浴
風を引ゝる成ゝて苦西吸ゝ夜前とゝふゝゝゝ

せゝらぎ

小き溝を伝ふせゝらぎとゝふゝ菱多ゝ紫茎下生ふゝ
ぢ紫ゝ流ゝゝせけバ山川の流きせゝぢる秋ハ流きを

ゝゝゝ

後撰集に ゝゝゝゝ

[illegible]
[illegible]ハ直垂[illegible]
[illegible]
裏なし[illegible]ハ綿を[illegible]裏のかたをいつるべし。
端ハ反[illegible]
台記ハ布三反布二反ぬぐいうのこと端を反と書
しかるべ。

[illegible]

同記ハ四五位ハ半靴有二華仙一六位深沓無二華仙一引靴とあ
ま。沓ぬぐとハ[illegible]

蟾蜍靴

一日ぬぐハ一切経と写すべ事

中右記云嘉保三年三月十八日今日京中上下萬
人一日之中書写一切経是有一聖人得夢想告進
催人々於各家令書写則供養送聖人許者依為
大善根聊所記置也とあり。是ハ数多人してあをむけハ
[illegible]べきぬぐ[illegible]ぬぐ[illegible]
つ[illegible]

又

一代要記ハ建暦元年四月廿三日以一万五千

人僧侶一日一切経書写供養導師前大僧正雅縁

かきたるうた

うるはしかりしかずのもりも克ふ蓋皮ばかりつうとうの

針のみ

今宵より針乃孔をみてづとつふ童蒙抄ふたをばみて

ばかりの耳ばかりや

ぬるとうり

夫本系ふ後拾遺尼君うつくしかりしのかるをよりて稲ざ色

てあるきるぬるふやつとてぞ物ろ彩買つ俗安藝意をして寄

をのけ系ハまどろまでぬるとうちまもよハ乃稲ざりよ今の号

ふいやしに何ふのるる俗又のるつまどりつまどりとし

松系るるつ紙

園大暦ふいるる康永三年二月廿一日今日予上ル花

大臣表状也草事云く尋常榻原二枚不加礼紙違

例如何本儀事高檀紙可加礼紙也但榻原又常事と

うるるる系ふるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

えどけしのうた

いるるるる系ふるるるるるるるるるるるるるるるるるる乃

るるるるる匠をバえどけるるるるるるるるるるるるる

ふ。ふるさとにいるに。史記の灌嬰をつかが傳ふ。斬二樓煩將五人一をいる注ふ。樓煩縣名。其人善二騎射一。故以名二射士一為二樓煩一。取二其美称一。未必樓煩人也。

たやはをいふ云

大鏡に。堀川の摂政乃たやり給ひしに。此東三條殿を。はつかををとそでやいとをかしくおたてまし、ゆふ。といふ。たやゆるを。業ゆるてまとり。いまはよふいつくしやいとつくしくおたてまつり。

下向

めのとをでまして加へる況。下向といふを。中昔は書なれを。多く還向とかきて。還向とは。還京東か下向。流罪か下向。をくいふ。

えいとつふまぐひて。下向とかくてとふをかるべし。

但馬ゐの城の湯のいでゐ

增鏡ふ。安嘉門院。冊後の巧みをしを伊兒ドふて。おハしまして。をもとらの但るをきまをしのいで湯をしふぐをせ。ゆふとあり。此温泉。その名どころ名をかりをも。

東宮傷炙治

增ぐみふ。後字多。去をのいまぐ。東をふおをしゆるほぐ。傷寒の時。ををしゆをふをして。炙治のををべきをしゆ。いをるをを。ふいまぐ例なきをを。いををべきをぐ。ぢぐををう。

ら、住そうてハ、ゆゑ一そうびとゆめ〳〵ゆゑ有てハ、
いまだ世ゝ〳〵ゆゑ有ると雖ども、いづハ雲を立て、おがゝさ
ゞむとゝ、ゆゑ倉、天皇厳嶋伊幸記ふ所奏ける是ゝ
て、ゆゑの雲に川出ると、ゆゑ一そうびとめ〳〵ハ、ゆゑとま
うせる事、世ゝどこ様ゝ、伊佐のわゞ、ゆゑ、おゝ
を引ひゝ後也。

岩屋

國〳〵に、おのづゝ有る洞ゝハ有〳〵で、造ゝかまへゝる石室のゝ
かゝこゝ有ゝ、ゆゑ〳〵きゝ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ
いふゝと、人みゝこゝ、ゆゑ〳〵ゆゑ、ゆゑ、穴居ゝ、ゆゑ

ひゝ〳〵、上つ代乃民乃ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、伊ゆ
ふゝ、ゆゑ民の穴ゝ、ゆゑ〳〵、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ
ゞ、中ゆゑ墓ゝ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ
ゝ、ゆゑ〳〵、書紀の神武天皇の御宮ゆ道臣命ゆ勅して、
作大室於忍坂邑盛設宴饗云ゝ、道臣命於是奉密
旨掘窖於忍坂云ゝ、綏靖天皇伊岑ゆ手研耳命
於片丘大窖中獨臥于大牀、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、上つ代
ふゝ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ

く牟呂といひし地名は、皆形容詞にて、何のしるしもなきかまへもなくふかきゆゑなきものなれば、極ぐりハ意味なくて、ふもやまとなり。今世にふるハ、多くハ此上つ代の石室（イハムロ）なるべし。

音學五書

といふ、みな顧炎武といひし人、音學五書といふこの書は、明の代乃末に、顧炎武といひし人、音學五書といふを作りて、後の学者に訛（ヨコナヒ）きて、いふ人乃著とハいふなれども、又韻書ごとに乃ちがひあるを、古書（キ）ごとに乃韻語を、ぐ〳〵引出（ヒキアカ）したるを、ぐ〳〵編ひしなり。今乃学のかたにさへづるやうに、華音形ぐ、ぐ〳〵いひ〳〵いみ〳〵くる

ふるひのふ思ひをるくせをなせはなりき。書ふぐ有名なる五書ハ音論といふ三卷、詩本音といふ十卷、易音といふ三卷、唐音正といふ古卷、古音表といふ二卷なり。

三ッぐるま

佛の具ふ、三ッ具足といふ地有り。三條良基おぐ、ぐ、せ給へ條。

ぐるまのみのことといふ地なり。銀のうり具足と云てしるり。

十二ゑ

日ど書ふ、皇后宮の位方へ、ぐ、せ給へ、ハ、あ、中こきの梅の十二乃位ぞふ日ど色の位ゑ、ぐ、ぐ、の位方へ、ぐ、ぐ、のかうちるゑ。

ぎのれうつぎ、えびぞめ、ちこうちぶ、茶山吹のはうこ、花がつ
のうこと、面乃はた、きこれぐ、かりうけてこ〳〵ゝ、ゝ、ゝ、

人従各一人とそなふ

咄

今案物語をかたりといひしなり。咄字のごとくは、說文に咄、相謂也とあり。文選なる張景陽が詠史詩に、咄此蟬冕、客君紳宜見書といへバ、客人かあるを、かたりといふ言なり。

いろはなるをふりしハ故しらず。

柳箱

柳箱といふ和、續日本紀九の卷にもあり。

大嘗ゆきもたのゑ

大嘗の悠紀主基をかうべ京より東と西なる國を定めらるゝやうにふれしなどゝ、ゝ神亀元年の変なる由

機備前、須機播磨、國し、天平神護元年の変なる由

機美濃、國須伎越前、ゑなるべき。

明々日

明後日より、小右記に、明々日とゝ、ゝ後ぐふれしなり。

降誕　まふあるぬ

同記、寛和元年四月廿八日壬寅、早朝罷出、寅時降誕女子、不逢産間、雖馳向産己遂了とあり。誕生を降誕といふなり。みうぶのなりたるをやうなるをゝ、ゝとなりしなるとこゝなる実資なれ、みづからの仏如の生れなるこゝなり。

かゝる事は有り。又ゐなかぬしいつれも。うるふんしるわ。近き事ゆゑふるまあるべし。

八的

同記り。寛弘二年五月十四日辛酉。早旦。資平自ニ左府一来云。昨出ニ馬場一。左右近騎射。各三人。又三兵。次令レ馳ニ鹿馬一。次令レ射ニ八的一。

祭ふ條ゝて神主決定むるる

糸東記ふ。寛仁元年十一月三日丁酉。天晴。為レ行ニ祭事一。参ニ梅宮一云〻。但氏人等遅参云〻。仍以ニ大膳少進従五位下上野朝臣廣遠一為ニ神主一云〻。先例以ニ氏人一為ニ神主一。而遅参。仍有レ定。

以ニ廣遠一為ニ神主一。とゝ。とゝ。ハ。祭ふ條ゝて。神主といふものを。さぐそらまてるこゝを。者しゝ。

万葉集ふ云る和氣といふ称

皇子ゝ。ゝ。ゝ。

称し給へるとも云へり。こは人の恵と云ひ給ふ事にまさりけて。
いとやるしさて恵といやしきを人をバ吾妹子といふべきなり。
さてさふらひなどのしるさるるふ。ことば是いつるものしきをば
ふ。[illegible]かやうかりつたらへえどいそしき和気とほえむく
まうづ。こまもはどて。人の恵といそしき者といそもも
和をやうきをていとやるしさて人の恵ふ。ものをば和をもと
ふ考ふ。ものをば。ものをば。ものをば。ものをば。ものをば。
しあ恵ものをいふ。ものをば。ものをば。ものをば。ものをば。
称し乃至君のこええや和気まうえよ。ものをば。ものをば。
気ハ汝なるふ君のこえめやハ。ものをば。ものをば。君なる吾

を得たる物なるべし。そもそも此三首ハ人をさして和気といふ也。
字の意ふ。恵といつるこゝろ。こゝろ乃ちものびしてまぶりつきと。
ものをば考ふ。まぶり仕ニそハ紙女郎ガ恵持つてあらるる。
ものをバ恵おもつを。和気といやしえてハいつべきよう恵きふ。紙いへ
ふ。ものをば。ものをば。ものをば。ものをば。ものをば。
和氣と注しつる。こゝろ。ものをば。ものをば。ものをば。
君を奴のごと。[イヤシ]賤えて。和気と[タブ]戯也ごといつる。
しる和なるこゝろ。ものをば。ものをば。ものをば。ものをば。
さふふいやしえていしなる。ものをば。ものをば。ものをば。
ふつふふ称なる恵ふ。汝こいつふ。ものをば。ものをば。

[illegible]和気はらみし給ひしるつぐれをくるどいやゝせて
やとゞけるけはくぶ多ゆいふ物ゝもどる。彼ゝびゝ女帝がゐるいづれ
をうきて。その和気とのゐる歌はいふもしう物との戲の句
を文ゝそのまゝ和ひらがなとこゝ。今の言葉わるゝ。又こゝもう物
らぢを吾妹子ゝいふ。ぎきをとゞが名ふといつるも。女帝がこゝゝと和
気といつる。うちとしてあづかゝるゐづまし。ゐとつゝべし。上乃
伴和気ちゝがゝまづゝ。ゆゑふむゝらうよゝ解トキ
はる人なきゆゑ。吉野ぢゝゐるうきハ。皆物ゝふゝもまぎれる
ゝ。戲奴と書ふよゝもよゝやゝゝ。

ある人の物ゝあゝ

ある人乃古文ゆゑ。儒の古文辞家ゆゑふとゝ。いでゝきゝ
風ゆゑうゝいつるハ。ゑづゝし。ゑづ古文ハ。奚沖ゝやゝゝゝ
ゝとゝゝるゝかの儒乃古文といふこの始名物る。伊藤氏る
ど。奚沖ゝゝゝゝ。ゐゝ。奚沖ゝいふ。先サキ
ぶちがゝとゝおゝゝゝ。荻生氏ハ。文おゝゝゝいでゝかゝゝふ
物ゝへるゝゝあゝむ。

上東門院

花経記。萬壽三年正月十九日。大皇大后沙祝髪のゝを記
ゝゝゝ。以テ御在所上東門院ヲ為院号トゝ行ゝゝゝバ
上東門院ゝいふゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。

厨子

佛の像を以てあくあを厨子といふ。同記ふ。同年三月
十日。清涼殿仁王八講、御装束をあるさるふふいえ
く。安置五大力佛殿於其中。件佛殿厨子也。時
繪如螺鈿云々。

梵語

烏乃梵語を。迦迦去引迦といふ。鳴声うらに称る名し。鷄を矩
羅倶吒といふ。ちごうをけらぐ。おのづうほど。尾を迦波
羅といふ

菊乃伊文

葉室大納言頼親、つ。右衛門佐ゝめ。文應元年

八月。新院石清水御幸、記一巻ふ。そ。伊装束
をあるさ。赤色、御袍。稟文中菊八葉蘇芳御下襲。同御半臂。有文御帯。くるる。
葉の伊紋といふ。やうけ文の伊例ふあるるあるや。

道者

伊勢宮。他宮方。系宮人を道者といつ。小朝熊、社神鏡
沙汰文の中ふ。天福二年ゝ文書の言に。熊野詣道者。
下総、國白井、郡、住人。南無妙房といわ。

葉瓜

伊陽殿のうへ乃日記ふ。天正三年六月十九日のぶ長
ようみのくまくそくゝ名所のうをうし。二こ籠をん上ふ

足高桑村郡に本巣郡に

五石形なる鍋釜

字治拾遺物語に五石なる鍋釜とて記りてきたる所に
ひとしくしてきたるなるべし今云ふ一斗だるの
なるべき鍋釜を斗形なるといふこなるべし

桟敷

物をかくるはしきなり中古よりは桟敷とかくなり小右
記にハ狭敷とかきたるハ桟敷とかくなるハ中古より
足さるとこの字ハ桟敷の字なり西宮ハ日本紀に度と
古事記にハ佐受岐と

佐度ふるる金乃出しるる

字治拾遺に鐵をかる者佐度ふるに
咲るる所を見るに金八千兵ばかりなり

かなまる

字さ
かなまるとは具鞍のかなまるとき
なるべし馬の鞍をかる具の名に

かなごろみ

日葡辞書に暦といふて
暦ものしるしや文暦に神代紀ふるとの

の暦本紀(コヨミハキ)ふ神よりとるきるハ先祭るべし又元日ゑ日ゑ日祭ど
日ゆよりあるきぬるきることとなしまり
きぬうづり代ぬぐるす
地蔵の物の中ふきておきるときとなて時くきぬうづりと
ゑ代ふちぬぎかしらをかるぶまてきるしうやまひを
ぐるつゆく時ゑきゑとほどぬをふてるわむるもきぬ
かづり祭ぐハぬぐをるやまひとしるゑも
きりゑくるんあしん
俗のるぐふきるとゑくいふるゑ日本紀の欽明天皇
の時ゑふ調吉師伊企儺(イキナ)といる人の新羅王啗我(クラヒカ)臈脂(レンシ)と

いひしわしきるとなしるる
國守神祭
ちゑ志賀の日記よいきくづよりゑ人きゑるる神拜といふる
して西のうちづりきしふゑくゑる菅原孝標の東國乃西
日ふゑりて下ゑしが祭よりいひふゑせゑるしむゑハ國日
但西ゑりゑぐりてハまづ部田の神社くふまでるし
ゑぐへるよりる
外面地祭ふ法ひふつゑ山りる人をゑめふゑうがくや初め
のゑゑりゑふゑるべしぶゑりぐゑるるとるハ俗の紀ふ和を
ゑゑべるゑよ祭くおゑわるきゑそばへもゑるぬるいふほど

中國

山陰道と陽道とは国々に成。中國といふこと。元慶二年二月三日は官符に伏尋物情陸奥出羽之在絶遠尚限五年因幡出雲之居中國何得六年とあり。類聚三代格にのせたり。

あるひとびとの

ものの人。別あることなれば二つあるべきなれども

しかるやとやはらぐるなり。いづれにか集ふべきなれ

やらんとの物。おのもおのもあるべきなりは

あるべきなり。話きまゝにまで。三の白ひと

ひとびとのもとにふるつぼで。稼ぐにもとめうるあへぐ又ものつこつこつよりいつゝはきをもあるべけれバ。なにやらふもけ

んう。

又吉備大たはは

政事要畧に貞観格を出していく。右撿太政官去天平神護二年九月十五日格偽大納言正三位吉備朝臣真吉備宣奉勅者とて。一代要記なるべし。真吉備

とはは。ちとはとは此大臣は。毋君を葬りたる墓誌を掘りて

まるもの。真備とあり。吉備とはは。よむとハ。まきびと

よるべなり。

狐仕ふる

中原康富記云、應永廿七年九月十日丙子、今朝室町殿醫師高天被禁獄、父子弟等三人也云々、此間仕狐之沙汰風聞、然而昨日於御臺御方仰驗者被加持之處、二疋自御所逃出、則被縛件狐之後、被打殺、依此事高天ガ狐ヲ奉詛付之條、露顕云々、仍今朝被召取云々、晝程又被召取陰陽助定棟朝臣、是モ仕狐之由、有虛説云々、末代之作法、淺間敷々々、

同十月九日甲辰、後聞、因人高天、昨日被流讃岐國、後經朝臣同國被流之云々、是等皆狐仕之輩也、

御袋

人の母をば袋といふ、同記ふ、享德四年正月九日、今曉室町殿姫君誕生也、御袋大舘兵庫頭妹也、

後鳥羽天皇御諱のよし

後鳥羽天皇御諱尊成、歷代編年集成ふ、タカヒラ、

俗字附あり、成平也といふ、たゞし、

ままちけの裝束抄ふ、りゑのかんぞといふ、又みちハ

なんぞふかくるも、菊ゐりてふくるもしるし、今いふ納戸

そこ也、

いるといふ説

俗乃ちふ。狩がいる。或ちいるてだるをいるがどいふ。けい
ぶといふ説。小右記ふ。供米千石許可入欤と見て。源氏物語
ふ。野ふ入をは言に。なるべきと見給ふる。目のいるあいるてうと
ありて。なるを。俗ふ。ゑあがいるといふてし。そのころよりやいる
をくし。なるを。りろうーの近き字は俗ふ。没字は異体けうと
同じくし

おちつき

抱へゆきつきて。咎ふ食ひ。俗ふ。著(オチツキ)をいふ。仁治三
年内宮假殿記ふ。奉遷使祭主従三位神祇権大副

大中臣隆通。文刻許参宮。云く。御息所経継神主之
宿館。長官沙汰進落付之飯酒をあり。

ちうしゅう

辛維章といふ者しやはうきる。和字辨といふものふいせ物
俗ふ。事日は星ちうしゅうとかるふ。知の字は支ふ作者
とて。ふりて異邦乃書に。知杭州(チクリ)。知袁州(チクリ)なども係る。知の字。
俗ふ。さぶらとよむ。世方は人を。文字ふ傍及といふて。ふるを支
ぬ。抱ふ。ふりて。清俊(ヨミカツ)の変ぜるをちうしゅうと。ふるは。知字は
つうしゅうのことにして。志流(シル)といふ。傍及はあることを志
らぶる。ぶることかの者らしは。左ふ。天皇は天の下をろしめ

さぶらひし、そのかみ、上つ代よりいまにいたるまで、ながき知恵、傍及
をもちぶしていまの世にハ行ふべきかや、あれ志流といふ言ハ、些
かの、信及のことなるべし、さべき全國の言ぐさをバ、ふるく
ものまで、まで漢字の義をのこらへ、みぐりなるあといふこの
ものびとぐさしやのたぐひし、

柳枝拾枝を文墨せしめ給事

明月記ハ、建永二年三月五日、賀茂哥合、今日給題、
七日、依有雨氣、御幸被公云々、次入御舞殿、御前敷
圓座、大納言依召候御前、次召哥人、有家取哥合、參
上、敦經持參榊枝置御前、為文臺枝本向御社方、以

木葉面可為上之由有仰、置哥合於其上、云々、幸上、
御社、次第如前、以櫛殿為御取、予依召取哥合、參上、
敦經持參松枝、為文臺如前、讀上了、各退下、

ゆりはまあづまの記中のことばなり

いうく公卿ものもの、むまれつきたるものなり、一の姫なるを、
姫君、大君、いひ、二を中姫君といひ、三をハ、つぎくの
三の君といひ、四の君といひ、二人もあるをバ、中
の君といひ、ひとりをバ姫君とハ、一をぞいひ、ものおぼえぬ、ふるや
う、みなかくのごとし、新猿楽記といふものに、右馬寮の人
の、十ばかりの女ものこゑのいとをかしく、大君、中君、三君、四君、五君云々

七佐(ノオテ)衛などいふこと、けもつを、藤原明衡作もつ、そのころまでも、
かくぞいつりなる。

癩病をかくとおもくいふて

ある人のいはく、信り癩病をかくとおもくいふて、害大の字なり。
癩病一名を害大風といふ。證治要決にてもかくのごとくいつり。
きべくにはるびの流をうちまくるをもくはめまどる。
ようにはへだみるわくにぬこしいふこといふもきべく俗語(ヨツコトバ)ハ書(フミ)と考
へくに云出る物にハいづれ字なり言乃多きを。おわくハ佛(ホトケ)ごの語
なりてこきむくわしの字ふいふを。ゆかもしるよりうつるりの
なり。佛後(ホトケゴニノチ)ばかりなり。近き書ふ多くにてゆかもしるこなりて

ハ。ききかくぶふいくよりわふこしる言など沙ゆ。学ある人をハ
ふくをもつていひ出をもしるくいるをとえつるをバゆるり形く
をもくるりをくるくるくるくるをもくるをもくるをも

上乃物をもとるし。者は俗ようて。字法の変化ゆかりとて
ものか。皮をとりいつゝ面の名ゆゑ。

ちゑは界　ちつさゝ[illegible]かい

八重ゝ俗ゆゑ。むへんちうゝいの方をとゝ。今の俗
ちゑふ。ちつさゝゝふ。といつゝ。此ちゑは訛まるし。ちゝかいを。伊
勢ゆゑふてゝ。ゆゝちゑふといつり。又ちゝゝ。江戸ゑにてハあ
てゝもとゝいつり。こゝもちゑは界はちゑふちう。

十二支の己を美くいつゝ

十二支の子を。孫といつゝ。孫ぎゝは畧き。卯を宇といつゝ。菟し。これ
を古ゑゝとゆ。字の俗字ゆゑ。菟と書るとゝゝゝはゝ

を。己を美くいつゝ。蛇の和名倍美く。和名ゆゑ。丑
寅ゆゑみゑ。二りゝはゝ。畧るハちゝふ。己のゝ畧き。三りゝはゝ。
孫ぎゝゝちゝゝ。巳をちゝゝふ。未のゝハ畧ゝぎ。

かゑゝふ朱印を。あてゝ

俗字文ゝ。朱印といつゝ。ふりのゝあをハいくゝゑゝぎゝ
ぎし。いゝゝ書判ゝ。やゝゆゝき物ゝとゝゝ。りゝこゝ
のゆゑて。ゆゝくゝゝみゑ花押ゝ。書判し。朱印あをゝ。
宗の代乃てゝゝゝゝぎゆゝゝゝ。

ゝゝがきゝゝゝ

いゝゝほゝきゝゝ。あゝハふいひゝゝ。紀を。ゝゝゆゝゝゝゝゝ。

らる法じ〳〵きて。おく〳〵を。為し書と今もいつの。ぬる
くゝとゞ有〳〵て〳〵ふて。そゝを文門屋形どやゝ好ゝ所ふ。杉し
と〳〵。ゝぶくきと〳〵。少し。ゝそもそのゝ。ゝ〳〵ぶ。ゝ〳〵ぶ。
らく〳〵ゝよゝとゝいひゝゝ〳〵ひし〳〵を。ゝふゝ。ゝ〳〵ふつきて。らくがきと
ゝいひゝ〳〵。又ゝゝゝハ。ゝゝで杉ふと杉く。ゝゝいぶ。ふゝ。ゝゝふゝ。ゝ
ゝゝ。ゝを。ら〳〵がきとハいつし。又ゝゝゝどゝ。ゝさゝび。ゝふ。ら〳〵
ゝゝゝいつゝゝゝゝゝゝゝゝかのゝ〳〵ゝゝよゝゝゝゝて。ゝゝゝハ
ゝゝ書杉ゝきん。詐ゝて。ら〳〵ゝゝハいつゝゝ。ゝ。ゝ問賢
注ふ。童儀ゝ書ゝゝゝ〳〵ゝゝゝ。ゝゝし。

宿老ゝゝ名主

京大坂などふて。町〳〵ゝゝ長を。宿老〳〵いひゝゝゝ。村乃
長を。ゝゝゝといふ。ゝゝゝ吾書ゝハ。ゝゝて田舎ふても。
名主〳〵いふし。ゝ名主〳〵いふ称。ゝ。ゝゝふ。ゝゝ。ゝゝ
ゝ〳〵。ゝゝハ中ゝゝゝ書ゝゝふ。ゝの村里ゝゝ名ふ。ゝ名ゝ
いふ名ゝ〳〵。ゝゝゝふ。ゝ〳〵ハ人名ゝゝ〳〵。ゝゝ〳〵ハ恒光名。永平名
などいゝ〳〵ゝゝし。ゝゝハ名主〳〵いふゝ。ゝ名ゝゝゝ
ふやゝ〳〵。

ゝゝゝゝ病死〳〵いふ。

今ゝゝ。ふゝやゝゝゝゝ乃文書ゝゝふ。人の死ゝを。病死
〳〵いふ〳〵し。ゝゝ人〳〵。病ゝで死ゝハ。ゝふゝゝ中にま

[illegible]ふ一人二人あるどもそこみべくもおもしろくはべるべくはみる病てもあるべ
[illegible]ばそこにそのあるべくはいそでもあるべくあるべくあるをそれ
[illegible]みるもみるもみるもみるもみるもみるもみるもみるもみるもみるもみる
[illegible]病死病死病死病死病死病死病死病死病死病死病死病死病死病死病死
[illegible]しもしもしもし

おひするおよる

女の泪ゝ人の袖ゝるがおそるゝ伊勢物語

ゝてハおそる物ゝいふ。ひづまにゝ寝ゝてゝおるゝといふ。伝聞

物ゝは夜ゝゝいふゝし。古ゝ著聞集ふ。月をゝしは絶せでけれよる

ゝゝとバゝゝ。塔後ふ。帝ハいづくにおるぞゝ姫のおゝぐふゝいふとバゝゝ。

文身の訓

かゝ書ふ。文身とゝゝ。みをゝゝゝゝ。列子。史本抄。後漢

紀倭の条ふ。黥面文身ゝゝ。高丘の萩ふ。ゝゝ。つぐふ。袖

をゝゝゝゝゝゝゝゝ。書紀景行天皇巻ふ。文身

のゝゝ同じゝゝ。

ゝゝ

今の学ふ。ゝゝゝゝゝ。餌取を訛ゝる名し。穢多とかくハ。俗

のさかゝらゝじし。和名抄ふ。屠兒。和名恵止利。屠牛馬

肉。取鷹鶏之餌之義也。殺生及屠牛馬肉。取賣者也。

とあり。翻譯名義集ゝいふ書に。旃陀羅。此云屠者。法

顕傳云。名為悪人。與人別居入城市。則擊竹自異。人

則避之ゝいへるハ。天竺の事なれ。此方ハ今の学ゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ。

足袋

袋ゝいふ足袋ゝ。和名抄ふ。單皮履。云ゝ。今按野人

以鹿皮為半靴名曰多鼻宜用此單皮二字乎と有り。

くぎぬき門

金根とおくて門のやうしるを和とくぎぬきといふ。狹衣の物語に門あけなくて、しもべくぎぬきといふ和をぞさすとかける。

ぐるい

よ足のくるゆきぐるい。俗言ふ。ぐるいといふ。いせ物語ハかいぐるいといふ。此言葉冊集ふ。引ぎとこゞ今の和歌に云ふ。さもてせおさへあり。かいぐるきう邪。伊勢ゞ集ふ。よしに〻和思ふ引きぬつ〻ぢ為ゝかひなしぐるさをゝれぞわ

ある。此句夫木和ハ三四の句。金根をかいぐるさてそゝみ。

さゝぢと云ふ何

人ふあるゝ時ハ。ぢゝばゝいふて。後撰集別の和ふ伊勢。さらばよとゝかゝ〻ゝ見せばやぬ風ふおぢ〻袖ぬれ。

稱ゝさ

金和のゝ〻ゝ稱ゝさんといふて。金葉集ふ下ふ。ゝゝふゝ見ゝゝ。ゝゝふ。ゝゝ見ハこゝ為ゝ人と稱ゝさ。

人の言いふゝ。ゝゝと掃て和忌ゝ

人乃去ゝ。ゝ掃ふ和いむゝ。万葉集ふ。すみの去ゝ。掃ゝ見ゝ。金中ゝかゝ。美松張ゆく君をいとふゝ。ひて。

ちぢれつまげる

後ろふ。髪ぬけちぢれたるを。ぬぐるといふ。万葉集にぬけ毛ちる

小説賞めちぢれたるをあぎかきなでとつる。けつをうぎのつま

ちぢれなり。

髪のたれくるを

いまよりよ。女は髪ゆひ。後と左右へそれ〳〵ながす。

をたれをといふ。をづまふてハ。ををといふ。源順集ふ。

をびもおりもの式。和名抄。髪元。うつくしき毛。

ふ。うつくしき毛。髪元。ふ。ぬぐ。おくれ毛。

ふ。つきうんぜ。金糸条。ふ。鬢髪。ふ。松ちぢれ

たをたれ。ちぢれ。

口状

三代実録十三の巻。宣命は中ふ。口状といふ。今の言ふ

口上といふ。口状を口上とかくハ。和俗言ふ。儿状と儿丁。

本性を本上とかきまぎらしし。

用（ヨウ）といふこと

今は言ふ。用用事。入用。急用。なぐさ。用

のつとといふ。ぶ。用と。言ふ。つとハ要ち

〻ゑなどさまざまにつくるなり。菅原贈太政大臣の書齋記
ふ。又朋友之中頗有要須之人適依有用入在簾中。
更科日記に。はるべきようもなくて。紙ばかりなどぞ。
らハりなどに。今はゑふいつる用あるし。後撰系雜二ふ。枇杷左大臣
よりたてまつりて。橘の紫式部のもとに。赤染衛門集に。
たるべきよりなりて。ものとこしかりふに。ものとハ。ものち
べきなりなりて〻いつるときハ。用ゑふわるなり。台記ふ。依有
急要退下宿廬。ものハ要字ハ〻徒ものでいまの学
いつる急用なるも
言葉ふ小付

言葉ふ小付〻いつる。後撰系ふ。年の数つもむ〻るの
歌言葉ふハいつるこづきをこそとそ〻うん。
北野の氏詠〻いつる
東衣ありてきるとなしの神ぞとハ神ふのちる梅ふてもこれ。
ふしぶふまる〻ものとふかるひあばいの〻ぶ〻そ〻も神やまりん。
此二首ものふ。小野の侍従ものいつる
う。二月ものハ神事ものとなるふ。ものいつる。後の歌
ざるものいつるものとなきふ。ものとなるふ。
次ものハ。俗のものしものつきし。話のものやりかるぶ。ものハ後
のものものとなるものとものふ。ものとものいつるべきこと。

かくとうたふうるうえうるし。世うるそハ。ほうるとるそうあ
ゑ〻鏡。ゑべ〻。叶ハ事。西行。ものゝ。うゝがゝ〻きゝ。
鏡のうゝに鶴をいつるう
今ハ世ハ。鏡のうゝ。ゝ。ゝ。